



私たちの研究室

西田 司 研究室

創域理工学部 建築学科 准教授

にしだ おさむ
西田 司 先生



取材に参加してくれた修士の学生とともに。手の矢印は「西」の方向を指している

正解のない意匠デザインに、 新しい発想の道をひらく

本学には工学部と理工学部に建築学科があり、それぞれの学部の趣旨に沿って様々な研究室が設置されている。その中で創域理工学部の西田司先生は「意匠デザイン」を中心テーマとした研究室を持っている。

建築学科には卒業後、設計や設備・構造など専門職の仕事につく学生が多く、製図など高度な専門スキルを必要とする学科である。そのため、学部の授業には必要な専門科目が多数設けられている。そしてこれらは学生が授業を通して専門的な建築の基礎を自らの学習で身に付けられる力であり、ゼミには少し違ったアプローチが求められるのではないかと西田先生は言う。

「研究室におけるゼミは、個性の異なる学生が集まる場です。学生の興味、関心領域、得意なこと、気になっていることなどをテーマとして、できるだけディスカッションし、集合的に広げる時間にしたいと考えます。それは結果的に個々の研究テーマに関わっていて、そこでの問題を深掘りし、科学し解明する、それが共創する価値となり学生を育てると思っている

からです。ゼミで取り組む課題も大枠は私が考えますが、各回のテーマなど学生に任せている部分はとても多いです」と話す。

もちろん研究室のゼミでは論文読解なども行われているが、かなり広い範囲で学生たちが興味を持つテーマで議論を行い、そこから意匠デザインの種を探していくのが西田ゼミの特徴と言えそうだ。

様々な興味を持つ学生が集い、試みる場所

取材には修士の学生6人が集まってくれた。

松浦開さんは小さな木製品の「カミツキガメ」という、電車の荷棚にスマホを取り付けるガジェットを作った。「電車の中で感じるストレスを、両手が空くことで緩和できるようにした」と話す。デジタルファブリケーションという、コンピュータ解析で木製部品を削り出すマシンを使って作成している。

品田十夢さんはBIMなどの建築情報に興味があり、あらゆる建築情報のデータを集めて応用しようとしている。「最近では設備配管の情報を集め、配管ごとに音を割り当てて、『設備配管を聴く』という音楽のようなアート作品を作り上げました」と話す。

染宮悠生さんは「植物が好きで、研究対象では日本民家にも興味があり、植物や庭と民家の関係を研究しています」と話す。

「植物は建築物より寿命が長く、都市の景観なども含めて風景を持続させるキーワードにもなるため、ヨーロッパなどで研究が進んでいる」と西田先生は話す。



電車の中での安らぎを求めた木製の作品「カミツキガメ」

久保田絢帆さんは日常的な時間の中での「待ち時間の過ごし方」に注目している。「単にベンチを置くようなことではなく、空間的な力を使い、駅や空港などの公共施設で、機能的には廊下でしかない場所を、滞在したいと思わせる空間に変えてみたいのです」と話す。

佐藤有希子さんは建築と心理の関係に興味を持っている。「人の居場所について考えたとき、例えば小学生の居場所は学校となりますが、色々な場所に枠組みを超えて子どもの居場所があっていいと思います。その場所は心理的に安全で落ち着ける場所なのだと思います」と話す。

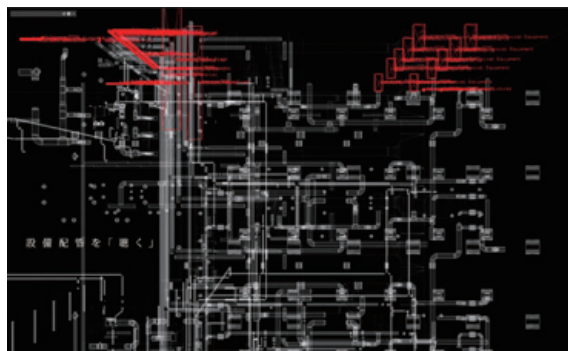
また、坂田佳誉子さんは「色々なことに挑戦し、挫折しながらも試し続けてきました。この研究室は『意匠研究』が中心とされていますが、都市計画などに近い部分もあり、都市計画のスタジオ受講もしながら考えてきました。その結果、やはり私は何かを解決するときに建物のデザインから入っていきたい、そう考えるところにたどり着きました」と話す。

意匠デザインと学生たちの研究

久保田さんは「大学1年次に『光の空間』という講座がありました。ダンボール箱に穴をあけ、『光から建築を考えてみてください』というものです。私は大学の建築学科に入ったら図面を描くスキルなどを身につけることに追われるのかと思っていましたが、建築をもっと広い角度から見ていくことを教わりました。これは西田研の考え方にも通じるといいます」と話す。

西田先生は「意匠デザインとは、『何を設計するところから建築ができるのか』と設計手法や設計論的に掘り込んでいく研究体系だと思います。その『何』が大学1年時には『光の空間』で、光を考えるとところから建築ができることを学ぶ、ということなのです。意匠デザインに正解はありません。安全性や環境への負荷など、定量的な要素はたくさんありますが、次世代の建築は、これまでとは違う領域から設計手法が作れるのではないと思うのです。先ほどの彼らの話の1つ1つがその『何』に該当するのです。そのときに研究指導教員としての私は、『面白そうだね、やったらいい』と言い続け、深掘りの道へ導くのです。そして伴走し、私自身もまだ見ぬ新しい建築の設計に繋がればと思うのです」と話す。

西田先生は数年前に『小商い建築、まちを動かす！』と言う書籍を共著で出版した。



BIMの設備配管を使って音楽と組み合わせたアート作品「設備配管を聴く」

「働き方や暮らし方が変わっている現代では、自宅を使って副業をする人が増えてきました。自宅の玄関先を小さな店にすることで、住宅街の中に古本屋やカフェなどが生まれ、街を歩く人の目にとまります。すると、そこを訪れる人が生まれ、やがて街の中に『愛着のある行きつけの場所』ができ、まちの暮らしが少し豊かになる。これは建物の話だけなら『住宅』の変化ですが、新しいこと、面白いことが起き、人の流れが変わるという意味では『まちづくり』につながっていて研究対象が広がるのです」と西田研の在り方に重ねて、本書の意味を語ってくれた。

「面白い」を続けていくためにどうするか

「ワークショップなどでも同じですが、心理的安全性が担保されている方が、人間はイノベティブな発言や発想ができます。最初は少し型破りだと思ってもやってみる、進化や新しさはそういうところから起こるし、研究の種はそういう所にあるのです。横浜で私も関わっているDeNAベイスターズによるネクストボールパークミーティングでの市民や子供たちのワークショップでも、『それ、すごく面白いね』と言いながら、どんどん妄想を膨らませてもらい、こちらの発想に無かったものをセレクトし実現してきました。自分が知らないことでも否定せず、『知らないけど、良さそうだね』とリスペクトすることで前進する力があるのです」と話す。

2022年度末には「研究室展覧会」を初めて開催し、都内の古いビルを会場として借り受け、企画を練った。年間の活動をまとめたレポートの掲示でも良いが、建築学科の研究室が古いビルを借り受けるのであれば、それ自体をどう見るか、「展示とは何か」「展覧会はどうしたらいいのか」などから考えはじめようと、ゼミのテーマとして考えてみたと話してくれた。

太田 正人（ジェイクリエイト）